



バスク主要都市の中で一番人口が多く、経済の中心であるばかりでなく、グッゲンハイム美術館やエウスカルドゥナ・会議コンサートホールは、文化面での見本になっています。生まれ変わったビルバオは、さまざまな目標を実現するエネルギーに満ちています。

## ビルバオ ビルボ



**エ**ウスカディの中で、もっとも人口の多いこの街には、すべてが揃っていません。商業活動、通りや娯楽施設のにぎわい。しかしながら外から訪れる人にとって、魅力的な首都として何かが欠けていたのです。その何かはこの数十年の間に、たとえば地下鉄の建設といった新しいインフラの創造、数多くの建物の修復、そしてグッゲンハイム美術館誕生とともにやって来ました。フランク・O・ゲリーの設計によるチタンとクリスタルで作られたこの巨大な建物は、活気的で多様、国際色豊かで居心地のよい、巨大でありながら人間的なこの街に、違えようのないイメージを与えたのです。以前ピオ・パロハが書いたように。“ビルバオは、どんどん深くおもしろくなっていく。”

ビルバオは、けた外れです。その広大な首都圏は、ビスカリアの大部分の住民が居住するだけでなく、バスク自治州全体の半分の人口を受け入れています。

ビスカリア県都の名前は、バスク語で“両側”を意味するビアルボが由来と考えられています。ネルビオン川を挟んだ両岸に定着が始まり、ビルバオは、中世にできあがりしました。1300年、ビスカリアの領主、ドン・ディエゴ・ロペス・デ・アロは、それまでは鍛冶と漁

業と農業だけの村にしかすぎなかったビルバオに、都市の肩書きを与えました。農業は時とともに徐々に消えていきますが、鉄鋼と海運は、つねにビルバオを特徴づけるものとなりました。ビルバオには、すでにローマ人によって採掘、利用されていた近隣の鉄鉱山があったために数多く鉄工場が生まれ、後にこの土地の産業改革へとつながる重製鉄業の発展を可能にしたのです。

実際長い間このネルビオン川の河口は、航行が可能でその港が海港よりも安全だったことから、カスティリア王国からヨーロッパ向けの貨物港になっていました。1511年にはアナ女王によって通商領事館設立が認可されます。初期の貿易は、ベルギーのブリューージュとフランスのナントから始まりました。その後、石炭の輸入と鋼鉄の輸出によって、イギリスとの交易がより緊密になります。ところで、フランス化されたドノスティア-サンセバスチャンに対して、ビルバオはつねにイギリス風のバスクの首都と考えられていました。

19世紀半ばには、すでに高炉が建設されていましたが、ビルバオの発展は、1874年のカルリスタ戦争攻囲を乗り越えるまで待たねばなりませんでした。その後アバンドとベゴニャ教区が一つとなり、開発計画が進められ、アリアガ劇場、証券取引所、アロンディガなど象徴的な建物が建設されます。



© グッゲンハイム ビルバオ・写真: エリカ・バナオナ

社会経済の点からビルバオは、河口左岸部の産業発達に加え、地元中産階級が促進した製鉄業、造船業、金融業、そして貿易業での輝かしい成長により、エウスカディの経済の首都となり、現在もその中心であることに変わりありません。

産業の衰退は、地域に強い影響を与える一方、プラスの面も持ちあわせていました。ビルバオは、活動の多様化を進めることによって、数十年間被ってきた汚い灰色の汚染都市のイメージを、克服することができたのです。

#### 国際建築家たち

前に述べたイメージの変化は、数々の一流建築家との意欲的なプロジェクトの実現によって可能となりました。生まれ変わったビルバオは、地下鉄の設計を手がけたノーマン・フォスター、スピスリ(大学の橋)のサンティアゴ・カラトラバ、そしてグッゲンハイム美術館のフランク・O・ゲリーの手によるものです。

グッゲンハイム美術館の誕生は、訪問客だけではなく地元ビルバオ市民の間にも真のブームを引き起こしました。チタン、かこう岩、クリスタルでできた目を見張る構造は、変わっていく都市の光りを映しながら、

河口の流れを進む未来の船を想像させます。

グッゲンハイム美術館は、その個性的な外観とは別に、館内に11,000平方メートルもの展示空間があり、厳密に現代アートの傾向に沿って、幅広い普及をめざしたすばらしい巡回展示プログラムを続けています。

グッゲンハイム・ビルバオ美術館横には、会議場、コンサートホールであるエウスカルドゥナが建てられました。ここは、旧エウスカルドゥナ造船所があった場所で、2,200人が収容できるホール、さらに会議用のすばらしい設備が整っています。2003年には、“世界一流会議場”としてアベックスアワード賞を授与されています。昔の産業地区と河口港湾の再生は、現在進められているアバンドイバラ計画によって完成します。

ビルバオ再生は、これらの大きなプロジェクトに、はっきりと見ることができますが、コンサートや食後の一杯を飲む時間にふさわしいもっと小さな空間にもうかがえます。たとえば、“シエテ カリイエス”の反対側にあるメルセ堤防の、古い修道院を改築した若者向け音楽の練習場・コンサートホールであるビルボロック。またアルビア庭園横の、以前映画館があったところに作られた飲み物とバスク語による文化活動、公演を組み合わせたカフェ・アンツォキアなどがそのよい例です。



ビルバオ市庁舎は、河口に身を乗り出すように建つビルバオの象徴的な建物の一つです。

#### 河口の右岸

最先端の流行の店が多くあるといっても、ビルバオの心は、「シエテ カリエス」の名で有名な「カスコビエホ(旧市街)」に常に息づいています。1983年の大洪水で歴史的被害を被った後に復興された旧市街は、ビルバオのレジャーや商業の中心地の一つです。その歩道は、伝統の店と現代的な店が並び、あまたのバーやバスク料理でも最高のものを味わえるレストランであふれています。

優雅に高くそびえ立つサンティアゴ大聖堂は、カスコビエホにある14世紀末のゴシック建築の教会です。また旧市街にあるヌエバ広場は、気晴らしの場所でもあり、また日曜日ごとの市やサントトマス祭など、数多くのイベントや祭りの開催場所でもあります。

河口沿いには、アレナルという広い散歩道があり、そこでも数多くの活動が行われます。その横には、地元作曲家ファン・クリソストモ・デアリアガを記念して建てられ、洪水後再建されたアリアガ劇場があります。ビルバオの軸になる河口の右側には、市庁舎、イエズス会運営のデウスト大学など、たくさんのお見どころがあります。

#### グランビア

19世紀末からアレナル橋は、旧市街と、広い区画にしゃれた建物が規則的に並び19世紀の典型的な拡張区とを結んでいます。その中心となる通り

は、地元で短く「グランビア」と呼ばれるグランビア・ドン・ディエゴ・ロベス・デ・アロです。この長い通りは、銀行のガラス張りビルがドン・ディエゴ・ロベス・デ・アロの銅像を囲んでいるシルクラール広場から、サグラドコラソンまで続いています。この通りを歩くと、ショッピング街や銀行などとともに、ビスカヤ県議会、モユア広場にある国税局、治安警察、カールトンホテルといった非常に美しい建物が目に入ります。

グランビアのかたわらには、アルピア庭園があり、そこには木々に囲まれたビルバオで名高いカフェイルーニャが望める広場があります。ここでは、一杯のコーヒーを飲みながら文化や政治が語り合われています。またグランビアの最後の区間には、ドーニャカシルダ・デ・イトゥリサル公園が広がっています。ここには、庭園、散歩道、パーゴラや大きな池があり、中心地でもっとも緑の豊かな空間になっています。公園の一方の端には、「グッゲンハイム効果」によって再びその価値が評価されているムセオ・デ・ベリヤス・アルテス(絵画美術館)があります。

ビルバオを展望するには、アルチャンダのロープウェーか、高所から街を眺めることができる、旧市街にあるエスペランサ通りからベゴニャ教会までのエレベーターが利用できます。ビルバオ人の性格については、近隣の人々からの批判にもあるように、少々虚勢を張るところがあるとも言えなくもありませんが、ただ誇り高い熱狂者にすぎないということもできるでしょう。

# 歩いて...

# グッゲンハイムに 負けない魅力

河の両側に並ぶ賑やかな通り、ショッピング街、庭園、そして広場。ビルバオは、グッゲンハイム美術館だけでなく、もっとたくさんの魅力で訪問者を楽しませてくれる県都です。

サンニコラス・デ・パリ教会の正面を過ぎて、旧市街へ向かいましょう。コレオ通りを通過して、新古典様式のヌエバ広場へ出ます。ここは64のアーチ形柱廊の装飾がされたにぎやかなテラスが並ぶ

シエテカリエスの賑やかなバーの中で迷子にならないうちに、再び、街の紋章にもあるサンアントン教会が建つ河沿いに出ます。また教会の横には、記念建造物のリペラ市場があります。

ここは、商業と金融の動脈です。折衷様式のビスカイア県議会、そして広くて美しい、エリプティカ広場としても知られるモユア広場で、少し足を止めましょう。



まずシルクラ - ル広場の名で知られる喧噪のエスパーニャ広場から、散歩を始めましょう。ブエノスアイレス通りを下っていくと、まず街を形作っている河に出ます。そこにかかる橋の向こうには、特徴ある市役所が見えます。

広場です。日曜日ごとに、市も開かれます。

広場を横切って、クルス通りにあるバスク考古学民族歴史博物館を訪れましょう。ここには、先史時代からバスク人が使用してきた道具やさまざまな物が展示されています。

そこを右に曲がって見える公園は、アレナル公園です。ここは、地元の人々がよく足を運ぶ公園で、待ち合い場所にもなり、さまざまな催しが行われるところでもあります。

すぐ近く、旧市街の“シエテカリエス”には、ビスカイヤのゴシック建築の代表例、サンティアゴ大聖堂があります。天使の正面入り口で立ち止まりましょう。

ビデバリエタ通りまで散歩を続けると、河沿いに輝く華麗なアリアガ劇場に出ます。

その後、いつも往來の激しいアレナル橋を渡れば、出発点のエスパーニャ広場に戻ります。グランビアに入る前に、コラムニスト、アントニオ・デ・トゥルエバの像がある、のんびりしたアルビア公園で、ちょっと休憩。それとも、カフェ・イルニャで元気を取り戻しましょうか。

ドン・ディエゴ・ロペス・デ・アロを記念して建設されたグランビアは、地元の人々には、短くグランビアと呼ばれています。

グランビアからは、



野外フェスティバルが数多く催される、ドーナカシルダ公園へ行くことができます。ここは、ビルバオの真の緑地帯で、すぐれた絵画が展示されている絵画美術館への入り口にもなっています。

散歩の締めくくりには、レカルデ並木道の奥から花で形作られたグッゲンハイム・ビルバオ美術館マスコット、パビーが挨拶します。見どころは、館内外ともにたくさんあり、十分に堪能することができます。

デウスト大学の対岸にある、ゲリ - 設計の目を見張るこの建築は、ビルバオの河を抱え込んでいるように見えます。



創立者 街の中心に位置するエスパーニャ広場に銅像があるビルバオの領主、ディエゴ・ロペス・デ・アロは、1300年に、ビルバオを築きました。



相違 中心に目を惹く尖塔が伸びる折衷建築の市庁舎。受付ホールは、エキゾチックなアラブ様式の造りになっています。



先史時代 偶像ミケルディ。その起原は未だに不明です。バスク民俗学に触れることができる考古学博物館に展示されています。



劇場 現代的なホール、エウスカルドゥナがあるものの、アリアガ劇場は、ビルバオ文化活動の中心です。パリのオペラ座から着想され建てられました。



ムデハル美術 カフェ・イルニャの内装。昔の雰囲気は今も残り地元民に親しまれているその他のカフェに、ボウレバードやラグランハがあります。



再評価 グッゲンハイムブームは、さまざまな流派の作品を展示するムセオ・デ・ペリヤス・アルテス(絵画美術館)を、よみがえらせることになりました。

